

杉本義一は大正十三年三月十日、父矢太郎、母まつゑの長男として初狩町中初狩八七四番地で生まれた。そして初狩村立尋常小学校から同高等小学校を経て、昭和十三年四月初狩青年学校に入学した。その前年昭和十二年日中戦争が勃発し、更に昭和十六年太平洋戦争へと展開して行くことになる。この年杉本は、笹子防空監視哨に配属されていた。昭和十九年召集令状による徴兵で、青山本部第六部隊に入隊。入隊後朝鮮不山(現プサン)を経て支那中国に入った。山東省済南にて軍事教育を受けた後、北支派遣軍第四二九四部隊北川中隊第四中隊の配属となった。

この頃日本政府は、我が国の置かれた非常にきびしい状況を受け止めて、ポツダム宣言無条件降伏を受け入れ、昭和二十年八月十五日を以って終戦となる。この時、杉本は朝鮮南の港町に駐屯していたが、其の後極寒の地シベリアで歴史の証言者とも言える強制労働の体験をすることになる。終戦後、ソ連によって強制抑留された日本人は日本政府の推計によれば、およそ五十七万五千人とされており、軍人・軍属が九割以上を占めているが、民間人三万九千人も含まれている。死者は五万五千人とされているが、それぞれの人数は帰還者からの聞き取りによって推定されたもので、確定値ではない。杉本は朝鮮興南の港町で武装解除され、船でウラジオストクに到着した。更にそこから数日徒歩で、殆ど飲まず食わずで着いた所が「アルチョウ」という炭鉱町で、石炭採掘の強制労働に従事することとなった。更にシベリアの冬将軍が駆け足でやって来て、零下三十数度という極寒にさらされて、栄養失調や赤痢で死亡する者が多く、入所時千名いたが八百名程になっていた。

抑留者の死者は、昭和二十年から二十一年にかけて集中している。徒歩や列車による長距離移動で体力を奪われ、更に経験したことのない極寒と重労働・餓えという三重苦、劣悪な住環境、医療体制の不備があいまって、悲惨な状態を呈していた。杉本の置かれた環境も全く同様であった。その生活状態の悲惨さの主な内容は次の通りである。○労働で最も重要な食事は劣悪なもの。朝食：黒パン マッチ箱大二ヶ分位、時には無いこともあった。昼食：無し。朝のパンを昼食用にまわす。夕食：汁食器に働いた作業量で分配。○入浴全く無し。十ヶ月後、行水程度の入浴があった。その間発生しているシミとの闘いが高じると発疹チフスとなる。



○次々と発生する餓死、凍死、病死者には、杉本ら残っている戦友が埋葬するが、凍てついた大地の為に困難をきわめた。戦友よ許してくれと念じながら。○監視哨の悲劇 収容所の周囲は有刺鉄線が張りめぐらされており、四隅には監視塔があつて、昼夜ソ連兵が自動小銃を持って立っており、日本人捕虜が柵に近づけば容赦なく発砲する。夜、馬鈴薯の皮を拾いに急造の天幕を張ってあるだけで、井戸・便所の設備はなかった。真ん中に満州から運んで来たストンプが一つあるだけである。労働は八時間が建前とされ立木を伐採して鉄道の枕木や、建築材料向として製材工場へ搬送する作業である。しかし、ノルマはきびしく、それを達成する為には、人馬の消耗によるものであった。満州キツ林省の収容所時代、新たに五十名程の合流

行き射殺された。深夜、場外畑のキャベツを、六名にて盗みに行きその帰途全員射殺された。三年間の石炭採掘強制労働の後、「バラチンカ」に移動の命令を受けた。二〇〇名いた中隊も、疲労や栄養失調で倒れ一五〇名に減っており、他の収容所から来た兵隊を合わせ、総勢五百名程の収容所となっていた。その収容所は密林を切り開いた山裾に、有刺鉄線を張りめぐらした柵の中

「大月人物伝」発刊のお知らせ
いつも「住まいル新聞」をご愛読いただきましてありがとうございます。本誌にて掲載いたしました「大月人物伝」を「心に舞う」シリーズ第六回目として製本発刊させていただきます。
書籍ご希望の方は先着500名様に進呈を致しますので下記まで、お申し込み下さい。
TEL0554-22-2500 FAX0554-22-5234

に墓石となっている者ばかりです。」と寂しげに語っていた。年令は三十五才程度と推察される方々であった。帰国後、発足時は五十余人の一個小隊であった戦友会も、六十回を超えた現在、参加する戦友も一桁となった。杉本自身は現在八十七歳で極めて壮健、安寧の日々を送っている。
参考文献
シベリア抑留 岩波新書
最後の戦争体験記 (社)山梨県老人クラブ 連合会
執筆 小林 脩一